2024 年 1 月吉日

## ～突撃★ドメーヌ最新情報！！～

# ◆VCN°15 ジェラール・デスクランブ

# 生産地方：ボルドー

## 新着ワイン 1 種類♪

**AC ボルドー・シューペリュール Ch.ルネッサンス キュヴェ ヴァン・シュール・ヴァン 2020（赤樽熟）**

6 年ぶりのリリースとなるシャトー・ルネッサンスの樽熟。前ヴィンテージ 2014 年は、ジェラールの息子のオリヴィエが全て仕込んだが、2020 年はシャトー・ルネッサンスの共同経営者であり、シャトー・オーゾンヌの現畑責任者ローラン・ヴァレットとジェラールが仕込んだ。この年は太陽に恵まれ、収穫したブドウは潜在アルコール度数が高くタンニンを多く含んでいた。ジェラール曰く、当初は樽熟成期間を 12 ヶ月で考えていたが、1 年経ってもまだタンニンがギシギシだったので、さらにもう 1 年熟成を延ばした。2 年熟成を経たワインは、果実味のボリュームが削ぎ落された分、アルコール度数 14%とは思えない清しさがある！加えて、塩気のある旨味の詰まったミネラル、心地よいしたたかな酸、タンニンの収斂味が三位一体となりワインの骨格を形成する！良い意味で価格に釣り合わない上品な酒質と味わいの構成にただただ驚くばかり！ちなみに、ジェラールの見立てでは 20 年の瓶熟でも優に持ちこたえるポテンシャルがあるとのこと！

### ミレジム情報

2020 年は、ブドウが早熟で、品質的にはアントシアニンが多くブドウがパワフルな年だった。春の遅霜はなく、4 月から天候は初夏の様子を呈していたため、ブドウの芽吹きがとても早かった。だが冬のスタートから雨が少なく、6 月に何度かにわか雨があったが、それでも畑は乾燥気味だった。開花時にちょうどミルデューが猛威を振るい始めていたため花が流れてしまうことが心配だったが、どうにか切り抜けることができた。6 月終わりからさらに水不足が深刻になり、加えて 7 月から 8 月中旬にかけて続いた猛暑と日照りによりブドウがレーズンのように萎れ気味になってしまった。だが、8 月の終わりから気温が下がり始め、9 月初めには雨が戻ってきたおかげで、再び張りのあるブドウに戻った。9 月は例年通り日中夜の寒暖の差のある理想的な天候に戻り、ブドウは一気に完熟に向かった。最終的に黒々と張りのある、果汁を多く含んだブドウが収穫できた！

### 「ヨシ」のつ・ぶ・や・き

（写真①）デスクランブのメルローの畑

2023 年のボルドーはミルデューが猛威を振るった年。特に、ミルデュー対策に対しボルドー液しか使用できないビオロジックの生産者にとっては試練の年だった。

（写真①）はデスクランブのメルローの畑。8 月中旬に訪問したが、ヴェレゾン（ブドウの色付き）がほぼ終わりかけていた。一見するとブドウの房が結構付いているようにも見える。だが、写真をよく見るとミルデューによりどのブドウも房の一部が枯れて茶色くなっているのが分かる。ジェラールが言うには、まだ手前のブドウは風通しが良いので房が多少残っているが、畑の奥はほとんど房が付いていないとのこと。

実際、彼と一緒に畑に入ってみたが、確かに奥に入れば入るほど焼け枯れたような房が多く見られた。（写真②）「今年のミルデューの猛威はここ 50 年経験したことのないくらい凄惨なものだった」と語るジェラール。通常、ミルデューは葉から徐々に繁殖が広がり、やがて菌がブドウの房に移っていくのが一般的だ。だが、今回猛威を振るったミルデューは別名 Rot Gris（ロ・グリ）と呼ばれる、ブドウの房を直接攻撃する非常にレアなものだった。「Rot Gris の厄介な点は、繁殖に気づいた時点でもう手遅れなこと。葉からミルデューが広がる場合、葉に黄色いシミのような跡が見られるので、その時点で早期発見しボルドー液などで予防対処できるのだが、Rot Gris の場合、枝とブドウの房を繋ぐ梗の根元をミルデューが最初に攻撃するので、見た目的には全く繁殖したかどうかが分からない。梗の根元がやられると樹液がブドウに回らないため、ものの数日でブドウの房が萎んでしまう。気が付いた時に慌ててボルドー液を散布しても、すでに時遅し。今回デスクランブの畑も Rot Gris により僅か 3 日間でブドウの 7 割近くが枯れてしまった。

(写真②)ミルデューにより枯れてしまったブドウ

（写真③）雑草が生い茂る放棄されたブドウ畑

「この強力なミルデューをもたらした原因は、ひとえに耕作放棄された畑にある」と言うジェラール。これはデスクランブの畑から 5 ㎞も離れていない場所にある耕作放棄された畑。（写真③）現在、ボルドーではコロナ禍以降のワイン不況によりこのような荒廃農地が至る所で見られる。彼が言うには、アメリカトランプによる関税の引き上げ、コロナパンデミックによる中国市場の閉鎖、ウクライナ戦争による物価高、フランス国内のワイン消費量の低迷などが重なり、格付けクラスのシャトーを除くボルドー全体が今、かつてない深刻なワイン不況に陥っているのだそうだ。そして、この不況下の中ワインを生産すればするほど赤字になることを危惧し畑を放棄した生産者がここに来て一気に増えたとのこと。彼の見立てでは、耕作放棄された畑は当然病気対策が行われていないため、そこが今回ミルデュー繁殖の温床となってしまったということだ。もし、それが原因だとしたら、自然災害ではなく人災という、とんだとばっちりを受けたことになる…。ジェラールが憤るのも当然の話だ。実際、ボルドーでは、耕作放棄された畑の放置やワインの過剰生産を重く見て、去年から農務省主導の下 1 ヘクタール当たり 6000€の補助金を付けてブドウ畑の更地化対策に本腰を入れているようだ。農務省のボルドーでの更地化目標は、1 万ヘクタールだそうだが、他の安い地域並の 6000€の補助金と引き換えに歴史あるボルドーの畑を更地にしたいと願う生産者はどれだけいるのかは疑問で、果たして対策はうまく行くのだろうか…。

（2023.8.16.ドメーヌ突撃訪問より）

**※弊社ＨＰ「フォト・ギャラリー」より、カラーでサイズの大きい鮮明な写真をぜひご覧くださいませ**